



**Data**

監督・脚本: 彭秀慧 (キーレン・パン)

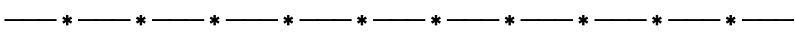
出演: 周秀娜 (クリッシー・チャウ)  
 / 鄭欣宜 (ジョイス・チェン)  
 / 蔡瀚億 (ベビージョン・チヨイ) / 楊尚斌 (ベン・ヨン)  
 / 林海峰 (ジャン・ラム) /  
 金燕玲 (エレイン・ジン) /  
 葛民輝 (エリック・マコット)

## 👁️👁️ みどころ

女にとって30歳は、お肌や容姿の問題もさることながら、仕事面と恋愛面で大きな転機。もっとも、それは「持っている女」特有の問題で、「持っていない女」には無関係？本作における2人のヒロインをみていると、一見そう思ってしまうが、いやいや・・・。

「29+1」＝「29歳問題」は万国共通の女性の悩みだが、本作が大ヒットしたのは香港ノスタルジーに包まれていたのも大きな要因。レスリー・チャンやウォン・カーウエイが大好きな人はもちろん、少しでも香港映画をかじった人は、そんな楽しみと共に本作を鑑賞したい。

なお、本作を契機に、俺も「29+1」問題ならぬ、「69+1」問題をしっかり乗り切らなくちゃ・・・。



## ■□■ アジアン映画祭発の大ヒット作に注目！ ■□■

2018年の第13回大阪アジアン映画祭のオープニングは、素晴らしい韓国映画『朴烈 植民地からのアナキスト』(17年)だった。また、香港映画『空手道』(17年)も、台湾映画『血親書』(17年)も良かった。キネマ旬報4月下旬号は第13回アジアン映画祭について、「挑戦的な作品が並ぶアジアン最強の映画祭」というサブタイトルで特集しているので、詳しくはそれを参照してもらいたい。そんな中、グランプリを受賞したのは、『中英街一号』(18年)、観客賞は『恋の紫煙3』(17年)だった。

他方、その前年の第12回アジアン映画祭で観客賞を受賞した後、本国の香港で公開されるや、興行ベストテンに7週連続ランクイン、20万人以上を動員するサプライズヒット

を記録、2017年を代表する一本になったのが本作だ。私が出資し、第13回アジア映画祭の特別招待作品部門で上映された藤元明緒監督の『僕の帰る場所』（17年）も今年の秋以降順次公開されていくので楽しみ。本作と同じように大ヒットしてくれれば嬉しいものだ。

## ■□■人気の舞台を映画化！原題は？邦題の意味は？■□■

本作の邦題は『29歳問題』だが、原題は『29+1』。これは何となく、分かったような分からないような・・・？そのココロは、同じ一つ歳を重ねるのでも、29歳から30歳になるのが特別な意味を持つ、というのは万国共通？ということであり、同時にそれは万国共通の女性の悩みということ・・・？本作の脚本を書き、監督したのはキーレン・パン。そして本作は彼女が作、演出、主演（二役）を務め、2005年に初演され、その後13年間繰り返し再演されている彼女の代表作の舞台劇「29+1」を映画化したものだ。

本作が面白いのは『29+1』という原題通り、本作で2人のヒロインになるクリスティ（クリッシー・チャウ）もティンロ（ジョイス・チェン）も4月3日で生まれで、あと1カ月で30歳になるという設定で物語がスタートすること。エレイン（エイレン・ジン）が社長を務める化粧品会社で、部長に昇進したことに見られるように、当初は仕事も恋も、そして人生そのものに自信たっぷりだったクリスティが、さまざまな問題に直面するところから本作の本格的ストーリーが始まっていくのでそれに注目。「29+1」という問題点はクリスティもティンロも共通だが、家主から退去を迫られたクリスティがティンロの家に転がり込む中で、同じ「29+1」という問題を抱えながらも、その解決策が全然違うことにクリスティが気づいていくストーリーが本作の軸となる。

舞台ではキーレン・パン自身がクリスティとティンロの2役を演じたそうだが、本作では、2人は性格も容姿も仕事ぶりも、月とすっぽんほど違う女性。また、互いの彼氏も大違いだ。そんな風に全く異質で、本来出会うことのないはずの2人が同じ「29+1」問題＝「29歳問題」に立ち向かっていく本作に、なるほど、なるほど・・・。こりゃ舞台も映画も万国共通の悩みを持つ女性から共感と支持を受けるはずだ、と納得！

## ■□■散りばめられた香港ノスタルジーの楽しみ方は？■□■

本作のパンフレットには、浦川留（映画ライター）の「散りばめられた香港ノスタルジー」と題するコラムがあり、そのタイトル通りの詳しい解説がされている。私はその全部は知らないが、半分以上は理解できるから、本作を楽しめる年代や人種の一人だという誇りを持っている。クリスティが友人の誕生日にプレゼントするウォン・カーウェイ（王家衛）のサイン入りの『花樣年華』（00年）のポスターの価値がわからなければ、その女子会でのトークはあまり理解できないはずだ。また、私はティンロが大好きな映画『日落巴黎（日没のパリ）』（89年）は全然知らなかったが、ティンロが大ファンだというレスリー・

チャンは『欲望の翼』(90年)、『シネマ5』227頁)、『樂園の瑕』(94年)、『シネマ5』231頁)、『ブエノスアイレス』(97年)、『シネマ5』234頁)と『追憶の上海』(98年)、『シネマ5』238頁)で私もよく知っているので、彼女の気持ちはよく分かる。

パンフ冒頭のイントロダクションには、「他にも人気グループ BEYOND、レオン・ライなど香港エンタメファンにはたまらないネタが随所に。そして極めつけはエンディング曲! レスリー・チャンが歌うバラード「由零開始(ゼロから開始)」は涙なくして聴けません。」と書いてあるが、さて、あなたはどこまでその楽しみ方を知ってる?

さらに、本作でクリスティがいつも利用するタクシー運転手を演じる中年男(エリック・コット)や、ティンロが働くレコード店の店主を演じる中年男(ローレンス・チェン)は2人とも往年の人気スターらしいが、これについては、私は全然わからない。また、本作でクリスティを追い出す家主を演じる中年男(ジャン・ラム)も元人気スターらしいが、それも私は知らない。弁護士の私の目にはそれよりも、香港ではこんな風に家主の都合だけで、簡単に借家人を追い出せることにビックリだ。本作を観ている限り、この借家の雨漏りがクリスティにとってのケチのつき始めだったが、それはきっかけにすぎない。認知症が強まっていた父親の死亡も時間の問題だったが、①部長に昇進したばかりの会社を辞めるか否か、②10年間付き合ってきた彼氏チーホウ(ベン・ヨン)との仲を結婚まで進めるのか、それとも別れるのか、という2つの大きな選択は、クリスティの「29+1」以降の人生を決定づけるものだ。

私には、本作は香港ノスタルジーの楽しみ方にこだわりすぎたためそこらあたりの掘り下げが少し甘いように思えたが、さてあなたは・・・?

## ■会社を辞め、恋人と別れ、さてこれからは・・・?■

それはともかく、そこで2つの決断を下したうえで、ティンロの部屋に転がり込んだクリスティだったが、彼女がその時点で徹底的に落ち込んでいたのは仕方ない。そんな彼女に「29+1」以降の勇気を与えたのが、本当はしてはならないことだが、ティンロの日記を勝手に読んだこと。壁一面にエッフェル塔の絵が飾られているティンロの部屋は、それ以外にもまさに彼女の趣味一色で固められていた。何事も前向きに、そして、自分流の楽しみに変えながら生きていくその姿勢はすごい。これだから、こんなブスな女(?)でも、恋人のホンミン(ベビージョン・チョイ)は、ずっと優しく付き合ってくれていたわけだ。

エリート社員でとにかく時間的余裕のないクリスティとチーホウ(ベン・ヨン)の恋人関係が、最近いつもギスギスしていたことに比べれば、このホンミンとティンロの恋人関係はいかにものどかだ。ちなみに、ティンロが乳ガンであったことが判明する後半からは、物語は少し深刻さを増してくるが、そこで「胸を触って」とか「セックスしようか?」等の軽い会話(?)が出てくると、再びティンロとホンミン間の恋人関係は明るいものに。

なるほど、このように対比してみると、エリート同士の恋が必ずしも良いものではないということが明らかだ。

しかし、会社を辞め、恋人と別れ、さて、これから「29+1」=30歳になるクリスティはどう生きていくの・・・？

## ■□■「持っている女」VS「持っていない女」の分析は？■□■

映画のパンフレットには、その作品を持ち上げるだけのゴマすり解説やゴマすりコラムが多いが、本作のパンフレットにある角田光代（作家）の「人生とはじめて向き合わされる年齢」と題するエッセイはそうではなく、さすがベストセラー作家の分析だと感心させられる。日本でアラサーという言葉が、いつ頃から人気となったのかは知らないが、今やその言葉は定着している。この言葉は、キーレン・バン監督が2005年に「29+1」の演劇を発表したときの問題意識と全く同じで、積極的にも消極的にも使うことができる。また、本作前半に見る「女子会」でのバカバカしいノリのおしゃべりを聞いていると、たしかに、女の30歳は大変な転機ということがよく分かる。

しかして、角田氏の分析によれば、一見して、クリスティは恋人も友達もいて、一流企業に勤めており、かつ上司に期待もされて昇進もする「持っている女」で、ティンロは女友達はいないようだし、男友達は恋人ではない「持っていない女」だが、さてそれはホント？角田氏はそんな問題提起をしたうえで、「映画の作り手は、『持っている女』や『持っていない女』を描こうとしているのではない。ここで描かれているのは、人生とはじめて向き合い、自分なりに格闘するひとりの、そして大勢の女性の姿だ。」と結んでいるから、その分析はさすがだ。本作については、このコラムの文章をじっくり味わいたい。

ちなみに、エイレン社長は1度目の30年を迎えるクリスティの退職をあっさり認め、前向きに送り出したが、これもさすがだ。これは2度目の30年を迎えた彼女が、さらに自信を持って3度目の30年に向かっていこうとしているためだ。そう考えると、「29+1」問題ならぬ、「69+1」問題を抱えている私も、エイレン社長と同じように、3度目の30年の残りを前向きに生きていかなければ・・・。

2018（平成30）年4月23日記